

博士論文要旨

本会の鳥飼玖美子会員が、2006年12月に以下の博士論文を英国サザンプトン大学に提出、博士号 (Ph.D.) を授与されました。以下、その概要を紹介します。また、本誌のためにやや長めの和文要旨をお書きいただきましたので、併せて掲載させていただきます。(編集部)

論文題目 : Diplomatic Interpreters in Post-World War II Japan: Voices of the Invisible Presence in Foreign Relations

提出機関 : Faculty of Law, Arts & Social Sciences, School of Humanities, University of Southampton, U.K.

提出者 : Kumiko Machida Torikai

指導教授 : Dr. Michael Kelly, University of Southampton

提出年月 : December 2006

英文要旨 : Interpreters have been indispensable from antiquity to the present in almost every sector of human society, especially in the borderless world today, where diverse languages and cultures interact. Nonetheless, interpreters have remained mostly invisible. The present study examines the role of such interpreters, who have hitherto been treated as virtually non-existent in official history.

While in recent times, there has been a shift in the perception of the interpreters' role, primarily in community settings, the focus of the present study is placed on interpreting in Japanese diplomacy, an area which has been accorded only limited attention. The primary research questions the study addresses are (1) What kind of people became interpreters in post-WWII Japan? (2) How did they perceive their role as interpreters? (3) What kind of role did they actually play in foreign relations?

In search of answers to these questions, the living memories of five pioneer interpreters in Japan have been collected, in the form of life-story interviews, which were then categorized and introduced in three distinct parts based on Pierre Bourdieu's concept of '*habitus*,' 'field' and 'practice.' The experiences of the five interpreters are presented as case studies and examined in the light of Erving Goffman's 'participation framework.' Then, based on the pioneers' narratives, interpreting practice is studied from four different aspects: comparison of oral interpreting with written translation; illuminating the salient features of orality in interpreting; the issue of 'culture' for interpreters; and finally, the role of interpreters explored based on Claudia Angelelli's study, leading to the final discussion on future perspectives of the study of interpreting and interpreters.

和文要旨

本論文は、2006年12月、英国 University of Southampton に Ph.D. 学位論文として提出したものである。日本の戦後外交を担った同時通訳パイオニアのオーラル・ヒストリーから、国際関係における「見えない存在」としての通訳者の役割に光を当てようと試みた。

これまでの通訳研究は国際会議における同時通訳に焦点を当てることが多かったが、世界のグローバル化で人々が自在に国境を超えることにより各国が多言語化するにつれ、司法・法廷や医療などコミュニティでの通訳に関心が寄せられるようになってきた。モノログが主となる会議通訳に比べ、対面コミュニケーションが中心となるコミュニティ通訳は、ダイアログ（対話）通訳とも呼ばれ、通訳者が介在しての対話を研究対象とする必要が高まってきている。

通訳者の仲介が重要な役割を果たすことは、外交交渉にも言えることである。公式会議にせよ非公式会談にせよ、首脳会談、記者会見、外交演説などの種類を問わず、通訳者は発言者の「意図 (intention)」「発話内の力 (illocutionary force)」「含意 (implicature)」(Grice, 1989) を汲み取り、メッセージを理解した上で、異言語で伝える。そのような言語間の差異を埋める流れの中で、通訳者は自身の意識に関わらず、仲介者としての役割を果たす可能性を秘めている。

したがって、日本の歴史を読み解く際に、ことに対外接触に関しては、通訳者の存在を無視することはできない。17世紀に制度が確立された長崎通詞から現在に至るまで、通訳者の果たした役割は、あらためて検証されるべきである。

戦後外交においても通訳者は欠かせない存在でありながら、守秘義務という制約、口頭通訳という特質から公式記録には残らず、わずかに通訳者個人の「思い出」として、若干のエピソードだけが断片的に綴られただけであり、戦後50年の日本外交における「ことばとコミュニケーション」の問題は、学術研究の対象とならないままであった。しかし現実の交渉の場においては、通訳者の瞬間的判断により重要事項が通訳され相手側に伝えられる。そこには、通訳者自身が交渉担当者の発言の真意や意図をどのように理解し、解釈し、それを異言語で表現したか、という問題が不可避である。異言語を訳す、という作業は、異なった文化と言語との間に横たわる溝にどのように橋を架けてコミュニケーションを成立させるか、という努力を必然的に内包する。

これまで「透明な存在」「姿なき存在」として扱われてきた通訳者の声なき声を拾い上げ、通訳者が対外折衝に果たした役割の一端を洗い出し、日本の異文化交流史における通訳の意義を再考することが本研究の目的であり、特に第2次大戦後、日本が敗戦の廃墟から立ち上がり国際社会に復帰するまでの道程で活躍した同時通訳パイオニアに焦点を絞った。調査対象となった西山千、相馬雪香、村松増美、国弘正雄、小松達也（敬称略、生年順）の各氏は全員、日本の戦後復興期から経済大国として認知されるまでの時期に、日本の外交、特に日米関係構築に多大な貢献をしている。

調査にあたって使用したオーラル・ヒストリー手法とは、オックスフォード英語辞典によれば、「テープレコーダーによって録音され、語り手の個人的な知識から引き出された歴史情報、その情報を学問的問題として扱うこと、または分析すること」と定義されている。トンプソン (Paul Thompson) はオーラル・ヒストリーについて「歴史を作り、歴史を経験した人々に、彼ら自身の言葉を通じて中心的な場所を与え」「歴史を見る際の焦点を変えるために使われうると同時に、新しい歴史研究の分野を切り開く」としている (p. 20)。オーラル・ヒストリーという新しいアプローチの利点としてトンプソンが挙げるのは「複数的な視点を再構成できること」(p.24)、「歴史に何らかの視点の移動をもたらすこと」(p. 25) である。

オーラル・ヒストリーは「個人の歴史」に関する「語り」をもとにするアプローチであり、インタビューによる口述史料の収集をその出発点とする。社会科学の立場から「ライフストーリー・インタビューという言語的コミュニケーション」(p. 13) を方法論として研究する桜井厚は、「ライフヒストリー研究法」「ライフストーリー研究法」「個人誌的研究法」「ナラティブ研究法」「オーラル・ヒストリー研究法」などと称される一連の方法の特徴として、「変動する社会構造内の個人に照準し」「個人がこれまで歩んできた人生全体ないしはその一部に焦点を合わせて全体的 (ホーリスティック) に、その人自身の経験から社会や文化の諸相の変動を読み解こうとするもの」であり、「主体の経験の主観的な意味やアイデンティティなどを重視する」ことを挙げる (p. 14)。

本研究は、調査対象者である同時通訳パイオニアの語りを、時に文献から補完し、テーマに沿って編集し再構成したという意味では、通訳者の「ライフヒストリー」だといえるが、見えない存在とされてきた通訳者に照準し「英雄を指導者から見出すのではなく、社会の大多数を構成する無名の人々の中に見出す」(トンプソン、p. 49) オーラル・ヒストリーでもある。「オーラル・ヒストリーは人生を歴史自体に組み込んでいくことであり、歴史の範囲を広げるものである」(p. 49) とトンプソンは語ったが、通訳者の人生を戦後日本の外交史に組み込み、戦後史の範囲を広げることを本研究は射程に入れた。個人の経験から社会や文化の諸相を読み解こうとするオーラル・ヒストリーは、通訳者の生き様を通して戦後日本の外交をコミュニケーションの視点から読み解こうとする本研究の目的に合致するものであり、また、口頭 (oral) での言葉を扱う通訳者の人生を追うにあたっては、文字ではなく「語り」から歴史を再構成するオーラル・ヒストリー (oral history) がふさわしいと考えられる。

具体的な方法としては、日本で初めて同時通訳を試みた 5 名のパイオニアにライフストーリー・インタビューを実施し、それぞれの語りから同時代の記憶を再構築した。主たる調査ポイントは以下の通りである。

- (1) 戦後の日本で、どのような人々が、なぜ、どのようにして通訳者になったのか。
- (2) 同時通訳の先駆者は、自らの役割をどのように認識していたのか。
- (3) 実際の通訳現場では、どのような役割を果たしていたのか。

以上の3点を通して戦後日本の対外関係における通訳者の存在を考察することにより、黒衣という存在の現実を洗い出し、通訳の透明性に深く関わる「正確性」「中立性」などの「通訳倫理」「通訳規範」をも検討し、通訳者の役割を再考した。

ライフストーリー・インタビューでは、まず5名が通訳者になるまでの足跡を追い、家庭環境、教育、当時の社会的コンテキストなど、通訳に直接は関係がないようにみえる事柄も含め、日本のあの時代に、なぜ通訳者への道を選んだのか、通訳者を一人の人間として理解しようと努めた。これは換言すれば、各自の「ハビトゥス (habitus)」を理解することである。ブルデュー (Pierre Bourdieu) によれば「ハビトゥス」とは、「歴史の産物であり、個人と集団のプラクティス、そしてさらなる歴史を生成する」(p. 82) ものである。加えて、同時通訳の草分けである5名が、どのようにして通訳者として必須の言語能力、異文化コミュニケーション能力を習得したのかを学ぶことで今後の通訳教育、ひいては外国語教育への示唆も得た。

さらに、ブルデューの言う「場 (champ)」、本研究の場合には通訳という「フィールド」に、一人ひとりがどのようにして出て行ったのか、「実践 (pratique)」としての通訳にどのように取り組んだのかを5名の事例から探り、外交交渉にあたって、先駆者はいかなる役割意識で、どのようなポジショニングで通訳に携わったのかを分析した。

分析には、ゴフマン (Erving Goffman) による「参与フレームワーク (participation framework)」を枠組みとして用いた。ゴフマンは、人間のトーク (talk) を会話のみに限定せず、政治家の演説、漫才、講義、暗誦、詩の朗読などを含む広範なものとして捉え、トークの参加者の役割・機能を、それぞれの「立場」との関連で検討することを提唱した (p. 137)。

人間が話をする際には参加者相互の間にさまざまな関係が生まれることから、従来の聞き手、もしくは受け手の概念は不十分であるとゴフマンは考え、関係性に基づいた役割機能に着目した。例えば「聞き手」は、「話し手」との関係から、「正規の聞き手 (ratified participant)」と「正規でない聞き手」に分類され、「正規でない聞き手」には「盗み聞き (eavesdropping)」と「立ち聞き (overhearing)」があり、「傍観者 (bystander)」という存在も無視しえない。この分類を通訳者に応用してみると興味深い。通訳者は、「盗み聞き」でも「立ち聞き」でもなく、通訳する目的を持って「正規の聞き手」として発言を聞くわけであるが、耳元でささやくウイスパリング通訳をしている姿は、「盗み聞き」さながらである。話し手は、通訳者に対して話しをするわけではないので、「正規」ではあっても「話しかけられていない聞き手」となるはずである。しかし、場合によっては話し手が急に通訳者に直接話しかけることがある。そうすると通訳者は、「直接話しかけられる正規の聞き手」という立場に役割が変化する。

「話し手」に関してもゴフマンは、聞き手に対して役割が固定されているわけではなく、多様なフットイング (footing) をとっていると分析し、3種類の機能を提示する。口を動かして声を発し音を伝達するだけの「発声体 (animator)」、言葉を選択して実際

に発話を作り上げ表現する「作者 (author)」、そして、発せられた言葉に責任を持つ「本人 (principal)」という異なった役割である。

この3種類の役割は一人の人間が兼ねることが多いが、どの役割を活性化するかは話者の社会的立場によって決まり、話し手は聞き手との関係性に対応して役割を刻々と変えていく。それをゴフマンは「フッティング (footing)」と呼んだ (pp. 144-145)。会議などで、立場を変えて発言することがあるのと同様のシフトである。「立場」と訳している日本語文献もあるが、「人との関係」を動的に表す独特の用語である。

このような通常の形態とは別に、ゴフマンは、「公に、<誰か>のために、自分以外の<誰か>の言葉で語ることがある」(pp. 145-146) と例外の存在を認め、同時通訳の例を挙げている。演説の同時通訳の場合、演題で話す人間が「別人の書いた原稿を自分のスピーチとして語ることがよくあるので、興味深い例となる」とも指摘している。ただし、ゴフマンは通訳者によるトークをそれ以上は追求していない。

そこで本研究では、通訳者の役割をゴフマンによる「話し手」の概念に基づいて分析した。前述のような、用意された原稿を別人が読むという例は複雑になることから、あくまでも、<話し手 通訳者 聞き手>という3者2言語の枠組みの中で、通訳者の役割に焦点を絞った。それでも、会話の状況は極めて複雑にならざるをえない。対話者の間に立ち、正規の聞き手としての立場が曖昧な『話しかけられていない聞き手』としてトークに参加する通訳者は、一般的には「音を出す箱 (sounding box)」もしくは「しゃべる機械 (talking machine)」(p. 144) として考えられており、他人が発した言葉をオウム返しに異言語で表現する人間、とされている。

ライフヒストリー・インタビューでも同時通訳の先駆者たちは、「黒衣」「透明な存在」「機械」などと自らの役割を描写し、「裏方」としての役割規範を信条として強く保持していることが判明した。しかし同時に、語りからは、それぞれの役割意識に「透明人間」「見えないというのは虚構、見える存在だがあくまで機械」「黒衣だけれど役者の衣装の裾くらいは直す」など微妙な差異も散見され、規範意識と現実の実践との間の乖離も発見された。実際の通訳の場においては、通訳者は単なる「発声体」として機能しているだけでなく、コンテクストに合わせた訳出などの創意工夫に「作者」としての役割が見られることが検証され、外交という場によっては「本人」を演じることもあった事実が浮かび上がった。5名のパイオニアの語りからは、通訳者は「黒衣」ではあるものの、本人の信条や意識とは関わりなく、決して「透明な機械」ではなく、その実践からは通訳者が<異文化接触を架橋するコミュニケーションの専門家>であることが判明した。「黒衣」としての役割を果たす中で、通訳者は共感と情熱、そして強い意志と洞察に支えられ、自身の判断で自立的に創造性に富む決定を下している。その意味で通訳者は、透明性や匿名性を超えた存在である、というのが本研究の結論である。

ライフストーリー・インタビューは2003年夏から2004夏にかけて、個別に数時間ずつ実施した。5名の語りからは、日本の外交で通訳者が果たした役割が鮮明に浮かび上

がった。それはある意味で、日本の外交史の知られざる一面を掘り起こし、政治・経済面での対外交渉における言語と文化の意味を洗い出し、国際関係の研究と異文化コミュニケーション研究を結ぶことにもなり得たと考える。

【編集註】 本論文を一般読者向けに日本語で書き改めた『通訳者と戦後日米外交』（鳥飼玖美子／みすず書房 2007年）の書評が pp. 269-272 に掲載されています。併せてご一読ください。

著者紹介： 鳥飼 玖美子 (TORIKAI Kumiko) 立教大学教授。日本通訳学会会長。日本ユネスコ国内委員会、国語審議会員 (第 22 期)、観光政策審議会員 (第 19 期)、文部大臣諮問英語指導法等改善推進懇談会 (2000 年度) などの各委員を歴任。2006 年 12 月英国サザンプトン大学より博士号 (Ph.D.) 取得。
